

中学校「調べたことを書く」レポート教材がかかえる問題

——レポートの「本論」の書き方を中心に——

木本 一成

はじめに

国語科教育における書くことの指導の重視を背景に、教科書には書くことに関する教材が多く掲載されている。教材の数だけではなく、読むことや話すこと・聞くことと関連づけたものもあり、掲載されている教材の種類（文種）も多い。一方で、書くことの教材が教科書全体で占めるページ数は極めて少ない。一教材がほんの数ページという状況である。さらに、教材を構成する解説文と作文例をみると、その内容は学習者にとって必ずしも有益なものになっているとはいえない面もある。特に、どのように書くかという記述に関する解説については、説明が不足しているものが多いように思われる。

教科書における書くことの教材をどのように作成するか、重要な問題である。この問題を解決するために、本論考では、「調べたことを書く」レポート教材を取り上げて、解説文や作文例の特徴と問題点の一端を明らかにするとともに、教材の改善例を示すこととする。

1. 研究方法

(1) 研究対象

平成28年版の中学校国語教科書には、レポート教材の代表的なものに次のようなものがある。

a 「調べて考えたことを伝えよう ——「食文化」のレポート」

東京書籍、中2

b 「調べたことを報告しよう ——レポートにまとめる——」

光村図書、中1

c 「図表を用いて報告する」教育出版、中1

d 「調べたことを整理して、わかりやすく」三省堂、中1

対象学年は、aが中2で、他はすべて中1である。内容は、aとdが文献調査で、bとcは日常生活を題材にしたアンケート調査になっている。本稿では、主に文献の引用に着目して考察するため、教材aを研究対象とする。なお、必要に応じて令和3年度から使用予定の見本本を取り上げる。

(2) 研究方法

中学校レポート教材の特徴と問題点を明らかにするために、大生向けに書かれたレポート作成の指南書である佐渡島・吉野(2008)¹、石黒(2012)²、井下(2013)³、佐渡島ほか(2020)⁴を参照する。これらの指南書は、学術的な文章作成を目的としていること、大学生の自学用のテキストとして作られていることなど、目的や内容が中学校レポート教材とは大きく異なる。しかし、両者にはレポート作成という共通点があり、差異に着目することでレポート教材の特徴や問題点を顕在化することが期待される。

2. 教材aの概要

教材aは、クラス全体の共通テーマとした「食文化」の中から自分が調べたい題材を決め、本やインターネットで調べたことをレポートに書いて、互いに読み合うという学習である。例として個人テーマを「マグロ・トロの味についての評価」とし、次のように解説文とレポート例で構成されている。

(1) 教材の解説文

初めに教材の目標や学習計画を示し、その後で実際の学習内容が、「題材さがし→文献調査→文章構成→記述→相互交流」という活動の順序で、次のように示されている。(見出しは原文のまま。内容は論者による要約。)

① 調査のテーマを決める

- ・ 食文化に関して、興味のあるものをキーワードで書き出す。
- ・ キーワードについて百科事典などで調べて掘り下げる。

② 情報を集め、整理する

- ・ マグロの味の評価について、図書館やインターネットなどで調べ、カードに書き出す。

③ 構成を考える

- ・ 例として示されている「1.テーマ、2.調査方法、3.調査結果、4.考察、5.参考資料」を参考にし、構成を決める。

④ レポートをまとめる

- ・ 内容ごとに分け、見出しや小見出しを付けて書く。

⑤ 読み合って意見を交換する

- ・ 他者の良い点や自分のレポートの改善点などを話し合う。

(2) レポート例

「マグロ・トロは日本どのように受け入れられていったのか」という題名のレポートが全文掲載されている。全文は約1,300字。内容には、江戸時代中期まで不人気だったマグロが、江戸後期、豊漁による価格の急落や醤油による保存法や調理法の開発で人気になり、さらに、戦後は食事の西洋化に伴う嗜好の変化によってトロが好まれるようになった、という経緯が記されている。全体は5つの見出しで構成され、さらに本文は3つに細分化されている。本文には、展開の順序、ナンバリング、出典の明記などの注意書きが付されている。(次ページに掲載したものは、注意書きやふりがなを削除

▼レポートの完成例

マグロ・トロは日本でどのように受け入れられていったのか

2年1組 石田正太

1 テーマ

私の好きな食べ物は「すし」である。特に「トロ（マグロの中でも脂の多い腹の部分）」がいちばん好きなすし種である。その「トロ」について調べてみると、昔はマグロそのものが今ほど人気のある食べ物ではなかったことや、今では好まれている「トロ」が昔は見向きもされなかったことが分かり、興味が湧いた。

そこで、「マグロ・トロは日本でどのように受け入れられていったのか」というテーマを立てて、詳しく調べてみることにした。

2 調査方法

（論者による省略）

3 調査結果

(1) マグロが不人気だったわけ

江戸時代の中頃まで、マグロは人気がなかった。主な理由として、次の3点が挙げられる。

第1に、効果的な保存ができなかった。当時、マグロは主に東北や九州で水揚げされており、人口の多い江戸まで運ぶのに時間がかかった。冷蔵庫などもなく、白身魚と比べても、マグロのような赤身魚は鮮度が落ちやすかった。

第2に、味の好みも昔と今では違っていた。「江戸料理集」（1674年）には、「マグロは、下魚でご馳走には使えない。」（現代語訳）と書かれている。（現代語訳の引用は、「マグロのすべて」48ページより）。当時は、脂っこくない淡白な食べ物が好まれており、マグロの味に対する評価は低かった。

第3に、マグロの呼び名がよくなかった。マグロはかつて「しび」とよばれ、「死日」を連想させるということから、不吉な魚とされていた。一方、カツオは「勝つ」につながるということで、人気があった。

(2) マグロが食べ始められた理由

江戸時代後期には、食材としてのマグロが広く受け入れられていった。その原因として19世紀前半から半ばにかけて、江戸の近海でマグロの豊漁が続き、価格が急落したことが挙げられる。人々は、新鮮なマグロを手軽に消費し、食べきれない分はしょうゆに浸して保存した。そうすることで鮮度の低下を防ぎ、生臭さを消すこともできた。すし店がマグロの赤身を使い始めたのもこの頃からで、切り身をしょうゆ漬けにしてすし種にしたところから「づけ」とよばれるようになった。

(3) トロはいつから人気のすし種となったのか

（論者による省略）

4 考察

マグロ・トロに対する評価が変化してきた過程を調べてみると、食材の評価を決める要因がいろいろあることに気づく。例えば、保存のしやすさ、味、名前による印象、供給量、価格、栄養分などである。そうした原因が、その時代の人々の価値観と結びつくことで、食文化が形成されていくのだろう。

5 参考資料

- ・「世界大百科事典」（加藤周一・編、〇〇社、2007年）
- ・「マグロのすべて」（河野博、茂木正人・編、〇〇社、2007年）
- ・たべもの起源事典」（西田哲・編、△△出版、2003年）
- ・「江戸前の味」（長崎福三・著、□□書店、2000年）
- ・「かつお・まぐろと日本人」（海老沢志朗・著、□□書店、1996年）

するとともに、一部を省略している。)

なお、参考資料として示されている5つの文献は、一部が伏せられているがいずれも実在する文献である。

3. 題材

「食文化」という題材は、中学生にとって身近で平易な話題であり取り組みやすい。

一方で、レポートの題材として、環境や福祉、少子高齢化などの今日的な問題を取り上げて教材化する実践がある。実際に優れた実践事例も少なくない。確かに、このような問題は重要ではあるが、学習者は今そのような問題の学びの途上にあつて十分に理解しているわけではない。したがって、このような題材を設定すると、学習者は、難しい問題についての知識の獲得と平行してレポートの書き方も身につけなければならぬという二重の課題を背負うことになる。

教材aが、学習目標をレポートの書き方の習得に焦点化し、題材は身近で平易なものにしたのは賢明な判断である。

ところで、マグロやトロの味の評価が歴史とともに変化してきたという知見は、学習者にとっては未知のものでも、一般にはある程度知られた内容である。したがって、食文化に関する文献を調べれば、疑問に答える内容が書かれた文献を見つけるのは容易である。このように、中学生が文献を読んで調べるといえるのは、多くの場合学問的な文献調査をさすのではなく、疑問に思ったことが書かれて

いる文献を探し出す学習を想定している。

このような学習は、関連する文献をさがし出し、読んで内容を理解して、文章に「まとめ」という活動をさせることになるが、一方で調べたことを「報告する」ということについて動機があまりになることを意味する。報告の相手を、あえて「マグロやトロの味の評価の歴史について知らない人」に限定して報告文を書かせるということなのかもしれないが、レポート教材でありながら、「報告する」ことよりも「まとめ」ことに主眼が置かれている。内容を分類・整理し、簡潔に言い換えて表現する学習として設定されているということである。

なお、教材aの解説文には、「分かった事実や考えたことをレポートの形式でまとめ」という記述がある。レポートの「形式」面に偏った教材化になっているようにも思われるが、他社の教材についても同様な記述が見られることから、中学校のレポート教材の特徴ととらえることができる。

4. 文章構成

教材aでは、参考資料を除くと本文は「テーマ」「調査方法」「調査結果」「考察」の4項目で構成されている。他社の教材でも、見出しの名称に違いはあるが分け方はほぼ同じである(教材dでは本文がさらに2つに分けられている)。また、各項目で何をどのように書くかについて、教材aでは次のように示されている。

- 1 テーマ テーマと、それを選んだり理由を示す。
- 2 調査方法 どんな方法で調べたかを示す。
- 3 調査結果 調べて分かった事実を中心に書く。
- 4 考察 自分の考えをまとめる。

これについても、1で調査の動機を書く、4で考えや感想をまとめるなど、内容の一部に違いはあるが、全体としてはどの教材もよく似ている。

一方で、大学生向けの指南書を見ると、井下（2013）では論証型レポートの例として「序論」「本論」「結論」の3部構成が示されている。⁵「序論」が1、2に、「本論」が3に、「結論」が4に相当するととらえると、形式的には大きな違いはない。しかし、各項目に書く内容を細かく見ると、たとえば石黒（2012）では3部構成をさらに6つに分けて、それぞれの内容を次のように示している。⁶（石黒の構成例として示されているのは論文であって、レポートではない。レポートの場合は、必要に応じて「①」⑥のいずれかを取捨選択して書く」ものだという。）

表 論文の六つの基本構成

序論	目的
① 問う	（自分の研究で明らかにしたい問いを示します。）
② 調べる	先行研究（関連する先行研究を紹介し、本研究のオリジナリティを示します。）
③ 選ぶ	資料と方法（問いを明らかに論証するための

本論	④ 確かめる 結果と分析（分析を経た調査の結果を示し、問いに答えます。） ⑤ 裏づける 考察 （なぜそのような結果になるのか、その理由を考えます。）	データの概要と方法を示します。）
結論	⑥ まとめる 結論 （①～⑤の論証のプロセスを要約し、今後の課題を示します。）	

② 先行研究の紹介やオリジナリティの明記は、中学生を想定すると到達目標が高すぎるので、文章構成の項目としては不要である。注目すべきは、⑥にある「①～⑤の論証のプロセスを要約」という箇所である。単にまとめたことを書くのではなく、論証過程を示してまとめることを指摘している。調査して分かった事実から結論に至るまでの筋道を整理して書くことを示している。これは、考察部分で、自分の考えに加えて感想を書くというもの（教材b・c）とはかなり異なる。なお、東書の令和3年見本本には、次のような記述がある。

特に、「テーマ」に対する「調査結果」を踏まえて「考察」を行う、という三つの要素の対応関係を意識しながら書くことが大切である。

対応関係とあるように、事実と考えの関係性が強調されるように改善されることが分かる。

石黒(2012)の6分類の中でさらに注目すべきは、「⑤裏づける」である。裏づけるとは、自分の考えが正しいことを証明することである。たとえば文献に関連する内容が書いてあった場合、なぜその記述から自分の考えにつながるのかを示したり、また、アンケート調査したところ特徴的な傾向が見えた場合、なぜその傾向から自分の考えを主張することができるのかを説明しなければならぬ。つまり、判断の基準を示したり、根拠から主張に至るための理由づけをしたりすることである。『中学校学習指導要領解説 国語編』(H20)には、「自分の考えの形成に関する指導事項」という項に次のように書かれている。⁷⁾

「知識や体験と関連付け」るとは、好悪などの感想にとどまらず、これまでに身に付けてきた知識や様々な体験と関連付けて、賛否を明らかにしたり、問題点を指摘したりするなど、具体的なものに基づいて考えを形成することである。

これは、「読むこと」についての記述であるが、自分の考えの形成には、知識や体験との関連付けや、具体的な物事に基づくことの重要性を指摘している。仮にこれをレポート作成にあてはめれば、調べて分かったことは、何に関連付けたり何に基づいたりして自分の考えに至ったのか、その過程を述べることになる。石黒(2012)が示す「裏づける」という活動は、知識や体験と関連付けて自分の考えを形成する上で重要な指摘だと思われるが、他社のレポート教材にも記載されていない。

5. 記述

(1) 要約

教材aには、レポートをどのように書くかという記述についての詳しい説明はない。「まとまりごとに見出しをつける」「調べて分かった事実を中心に書く」という記述がわずかに見られるだけである。他社の教材でも似たような状況で、書き方を詳述しているものはない。レポートは「まとめる」ことが主要な学習活動なので、あえて書き方を説明する必要はないことだろうか。

このことに係って、読書感想文という文種を批判的に検討した竹長(1999)は、新たに「読書レポート」という文種を提案し、次のように述べている。

第三に、「レポート」は、ただ単に、他人の表現をなぞるようにして、内容を短くまとめるだけではない。…(略)…レポートの文章構成や表現は、原則として、レポートの書き手自身の「自分の言葉で」書かなければならないのである。つまり、レポートは、メタ言語的再構築≡創造、なのである。他者の使った言葉や表現をふまえつつ、それにコメントを加えつつ、要約していくものなのである。

これは読書レポートの意義について述べた箇所ではあるが、竹長は、読書レポートを書くことを「創造」的な行為としてとらえ、「ま

とめる」こと、すなわち「自分の言葉で」表現し直すことの大切さを指摘している。その際、「他者の使った言葉や表現をふまえつつ」とあるように、他者の言葉と自分の言葉を区別しながら要約することの重要性を強調している。もし「まとめる」という学習にこのような意義があるとすれば、どのようにまとめるのがよいのか、その説明を教材の解説文の中で詳述するのが望ましい。

(2) 文章表現

「テーマ」「調査方法」などの見出しをつけた各項目で、どんな内容を書くかについての説明はあるが、どのように書くかについてはほとんど記載がない。例えば、研究テーマを書く際によく用いるキーワードや文型を示したり、本論で出来事の経緯や対照的な二つの事柄を書く際に使われる典型的な表現を示したり、という説明がない。このような学習事項は小学校の教科書で説明済みなので省略されているのかもしれないが、大学生むけの指南書では詳細に記述されている。

たとえば、井下(2013)は、学術コンテンツ・ポータルに掲載されている論文を複数読めば「レポートや論文の表現には、共通した構成があること、接続表現も論理展開に応じて、共通した表現が用いられていることがわかる」と述べた後で、論証型レポートでよく用いられる表現例を具体的に列挙している。また、石黒(2012)は、論文の文体の特徴について次のようにいう。

論文は名詞が中心のジャンルです。専門性が高く、情報密度の

濃い内容を正確に伝えるには名詞が適しているからです。一方、主観性の強い形容詞や副詞は論文になじまず、その使用が避けられることで独特な文体が掲載されます。

真実を客観的に述べることを目的とした文章ゆえに、名詞が多く形容詞や副詞が少ないという指摘は、学習者がレポートの文体をイメージするときに有益である。

ところで、教材aのレポート例の文体を項目(見出し)ごとに見ると、「3調査結果」だけが他のものと違うことに気づく。他の項目には次のような文が多い。

1 テーマ

- ・私の好きな食べ物「すし」である。
- ・そこで、…(略)…というテーマを立てて、詳しく調べてみることにした。

2 調査方法

- ・学校図書館や…(略)…調べて基本情報を集める。

4 考察

- ・そうした原因が、…(略)…食文化が形成されていくのだから。

これらの文は、書き手自身が自分の嗜好や思い、考えを述べたものである。文末に見られる断定、推測などの表現からは、判断や動作の主体が学習者自身であることが分かる。これに対して、「3調査

結果」には、次のような文ばかりが出てくる。

3 調査結果

- ・江戸時代の中頃まで、マグロは人気がなかった。
- ・すし店でマグロの赤身を：(略)：「づけ」とよばれるようになった。
- ・背景として、日本人の好みが、：(略)：：変わりつつあったこともある。

これらの文は、事物や事象を主語にした断定表現で書かれている。その断定表現には、書き手の思いや考えが込められているのである。うが、そのことを示す直接的な表現はない。竹長（1999）のいう「自分の言葉で」書かれていない。明らかに、他の箇所とは書き方が異なる。

この「3 調査結果」の部分の書き方が他と異なるのは、この部分「が」、「マグロ・トロは日本でどのように受け入れられていったのか」という疑問について、調べた文献に書かれていた内容を整理し、要約した箇所だからである。注意書きには「調べて分かった事実を中心に書き」とあり、それに準じて分かったことだけがここには書かれている。

要約を書くとする、このような書き方をするのがよいのかもしれないが、レポートの中で異なる二種類の文体を用いることになる。レポートに慣れていない学習者の実態を考慮すると、二種類の文体を用いて書き分けることについて解説が必要であろう。なお、学習

者に文体を意識せずに書かせるのであれば、表現の主体がわかるように、「3 調査結果」の項の最初に、「以下の内容は、文献を読んで要約したものである」と書いておくという方法もある。こうすれば、他の箇所と同じような書き方をするようになる。

(3) 引用

「3 調査結果」の中に、次のような記述がある。

「江戸料理集」（1674年）には、「マグロは、下魚で馳走には使えない。」（現代語訳）と書かれている（現代語訳の引用は、「マグロのすべて」48ページより）。

ここでは、出典を示して引用するという方法が用いられている。しかし、他の参考文献には類似の内容が次のように書かれているので、これらをまとめれば、あえてさきのように引用する必要はない。

・「江戸風俗志」に、「サツマイモ・カボチャ・マグロ等は甚だ下品にて、町人も表店住おもてだんの者は、食する事を恥づる體也」とある。¹¹

・まぐろは生産地が江戸から遠隔であったため、鮮度のよい魚が手に入らなかつた。そのためこの魚は下魚（低級な魚）とみられていた。¹²

・「江戸風俗志」にも延享年間（一七四四—四八）までは「鮪や甘藷、南瓜などは下品な食物で、町人でも表店住いの者は恥

づる体なり」とあり、天保（一八三〇年）以降、これらの物も客に供するようになったとあります。¹³

6. 本論部分の修正のために

(1) 引用の意義と実際

ここで引用が用いられているのは、「学習指導要領解説」（H20）の「課題に沿って本を読み、必要に応じて引用して紹介する言語活動」という事項を反映させるためである。¹⁴ レポートの欄外には、「引用箇所はかぎ括弧でくくり、出典を示す」と注意書きが加えられている。つまり、教材^aでは、文献を引用して書くことが想定されているということである。

ところで、さきに取り上げた箇所は、出典の記述をそのまま引用したのだが、「3 調査結果」に書かれている他の箇所の内容も、「5 参考資料」で示されている文献の内容をもとに書かれていて、文献を参照しているという点で同じである。引用か要約かの手続きが違うだけである。手続きの違いとしてみると、引用についてはその説明がレポートの中に明記されているが、要約については明記されていない。注で、「調べて分かった事実を中心に書き」と示すのではなく、たとえば「複数の文献で調べた内容を要約して書く」と示す方が学習者には分かりやすい。

なお、指南書では文献からの要約も引用の一つとみなし、要約して引用することを、井下（2013）は「間接引用」といい、佐渡島・吉野（2008）は「要約引用」という。¹⁵ また佐渡島ほか（2020）は、要約引用の場合でも「文章中のどこからどこまでが文献内容の説明であるのかが読者に分かるようにし、出典を必ず示す必要がある」という。¹⁷

大学生がレポート作成で引用する意義は、たとえば石黒（2012）の「自分の研究が、それまでの研究の流れのなかでどのような位置を占め、そこにとどのようなオリジナリティがあるかを示す」とめというように、学術研究にある。¹⁸ しかし、国語科の書くことの学習の一つとしてレポートの書き方を学ぶ中学生には、これは直接的にはあてはまらない。

引用の意義にかかわって「学習指導要領解説」（H20）には、「説得力のある文章」にするために、「客観性や信頼性の高い資料を選んで用いることが重要」とある。¹⁹ 客観性がひとりよがりでないことを指すとすれば、引用は、他者の考えや他者が作成した資料を自分の文章の中に取り入れる過程で、自分自身の考えの相対化・対象化を促すという意義を認めることができる。また信頼性がものごとの論理的な筋道を指すとすれば、引用は、ものごとをいくつかのまとまりに分け関係づける思考を促すという意義を認めることができる。

このような内容を教材の解説文という形で示せば、たとえば次のようになる。

(1) 引用の意義

「引用」は、公開された芸術作品の著作権を保護したり、先人

の学術的な成果をふまえて研究を進めたりする上でとても重要な手続きです。この単元では芸術作品の創作や学術的な研究を目標としているわけではないので、引用することの意義を次のようにとらえてみましょう。

- ・他者の考えや他者が作成した資料を自分の文章の中に取り入れることで、自分の考えを他者と比べたりとらえ直したりするという意味があります。
- ・他者の考えや他者が作成した資料と、自分の考えを明確に区別して書くことで、物事を分けたり関係づけたりするという論理的な思考をするという意味があります。

(2) 引用の目的

引用する目的には、「根拠になる内容を取り上げて自分の主張を補強するため」「あえて異なる主張を取り上げて否定することで、自分の主張を補強するため」「特に注目すべき箇所を強調するため」「補足的な内容を付け足すため」などがあります。目的を明確にして引用しましょう。

(3) 引用の実際

次に示すのは、本論の中で補足的な内容を付け足すという目的で引用する場合の事例です。自分の言葉と他者の言葉が区別して書かれていることを確認しましょう。

〈例〉

日本人が古くからマグロを食べていた証拠として、他の文

献には記載されていなかったが、『かつお・まぐろと日本人』では、「万葉集」を取り上げて次のように述べている。²¹⁾

まぐろ漁業について、山部赤人（奈良前期の歌人）が詠んでいます。

やすみしし吾が大君の神ながら高知らせる印南野の大海原のあらたへの藤井の浦に鮪釣ると海女船さわぎ

（巻六・九三八）

（わが大君が神意のままに高々と宮を造り住まわれる。印南野の大海の原の（あらたへの）藤井の浦にまぐろを釣ろうと海女船は騒いでいる…（略）…）

これらの歌から、当時まぐろは釣りや、漁火を灯して釣で突く方法によって漁獲されていた事がわかります。

この記述から、マグロは江戸時代よりはるか昔、奈良時代から食べられていたことが分かる。漁法についても釣りや漁り火を灯して釣で突くとあるので、船で沖合まで出て捕っていたものと思われる。

(2) 分析の手続きの記載

レポート作成で、調べて分かったことを書くのは重要なことであるが、どのようにして分かったのか、その手続きを書くことも同様に重要である。なぜなら、このレポート例の場合は、本を調べたら疑問に関する内容が書かれていた、という単純なものではないから

である。「5参考資料」には、5つの文献が示されている。この文献の内容を確認すると、どの文献にも類似の内容が書かれていることがわかる。つまり、このレポート例では、文献から類似な内容を抽出するという手続きが行われたと推測される。

レポートを論理的な文章にするには、ここにみられる手続きを「3調査結果」に書き加えるのがよい。それを教材の解説文という形で示せば、たとえば次のようになる。

(1) 「3調査結果」で取り上げる内容
・何が分かったか、分かったことをいくつかに分類しよう。

・どのようにして分かったのか、その方法を示しましょう。

(2) 判断の拠り所

・何を拠り所として調べたことが「正しい」と判断したのかを示しましょう。(調べたことが「正しい」という裏づけをします。)

(3) 書き方の実際

・次に示すのは、5つの参考資料をどのように参照してまとめたかという手続きを示したうえで、分かったことをまとめて書いたものです。手続きの書き方を参考に見てみましょう。

〈例〉

3 調査結果

図書館で食べ物としてのマグロについて調べたところ、5つの資料が見つかった。(そのうち2つは同一作者のものなので、実際には4種類になる。)次に、この中で3つ以上の資料に同じ内容が書かれていれば、それは正しい内容だと判断した。また、まとめる際には、それぞれの項目について最も詳しく書かれた資料をもとにした。その結果を整理したのが次のものである。

(1) マグロが不人気だったわけ

江戸時代の中頃まで、マグロは人気がなかった。主な理由として、…(略)…。

7. 結論

これまで見てきたように、教材aの解説文やレポート例には、次のように解決すべき課題があることが分かった。

- ・複数の文献を読んでわかったことをまとめた箇所であることを、「要約」という言葉を用いて明確に説明していない。
- ・調べたことが確かであることを示す「裏づける」という処理が行われていない。
- ・レポートでよく用いる典型的な表現が示されていない。
- ・文体が他の箇所と異なり、書き手自身の主体が示されていない。

・引用する目的が必ずしも明確とはいえない。

これらの問題を解決するために、「引用の意義と実際」「分析の手続きの記載」を書き加えた解説文の案を示した。

〈引用文献〉

- 1 佐渡島沙織・吉野亜矢子(2008)『これから研究を書くひとのためのガイドブック』ひつじ書房
- 2 石黒圭(2012)『この1冊でちゃんと書ける！論文・レポートの基本』日本実業出版社
- 3 井下千以子(2013)『思考を鍛えるレポート・論文作成法』慶應義塾大学出版会
- 4 佐渡島沙織・オリベイラ、デイエゴ・嶋田大海・デルグレゴ、ニコラス(2020)『レポート・論文をさらによくする「引用」ガイド』大修館書店
- 5 3に同じ。pp. 36-37.
- 6 2に同じ。pp. 16-18.
- 7 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版 p. 56
- 8 竹長吉正(1969)『読書レポートの誕生』東洋館出版社 p. 20
- 9 3に同じ。p. 54
- 10 2に同じ。p. 125
- 11 岡田哲編(2003)『たべもの起源事典』東京堂出版 p. 424
- 12 長崎福三(2000)『江戸前の味』成山堂書店 p. 103
- 13 海老沢志朗(1996)『まっお・まぐろと日本人』成山堂書店

p. 20

- 14 7に同じ。p. 39
- 15 3に同じ。pp. 107-108.
- 16 1に同じ。pp. 80-84.
- 17 4に同じ。p. 6
- 18 2に同じ。p. 30
- 19 7に同じ。p. 70
- 20 13に同じ。pp. 18-19.

(広島経済大学)